様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４１０

研究課題名（和文）沖縄文学成立に関する基礎研究

研究課題名（英文）a basic reserch on the formation of okinawa litelature

研究代表者
新城　郁夫（SHINJO, Ikuo）

琉球大学・人文社会学部・教授

研究者番号：１０２８４９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果としてまず『沖縄に連なる－思想と運動が出会うところ』（岩波書店、2018年）の出版がある。この書は既に『みすず』や『図書新聞』の書評において高い評価を得ている。また、本研究の主たる成果は、1900～1920年代の沖縄文学関連資料の調査収集による基礎データ構築に明示されており、この資料に基づき、幾つもの論文を公刊し国内外の学術会議において口頭発表を継続的に行った。これらの研究成果発表により、沖縄文学成立期に見いだされる表象主体意識の歴史的政治的位相を明らかにすることができ、そして、成立期沖縄文学に見られる思想的あるいは社会運動的可能性を明示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで沖縄文学成立に関する研究は、特にその郷土色の特異性と方言使用に見られる言語的葛藤とに焦点を当ててきた。本研究はその研究史的地平を更にひろげ、近代東アジアめぐる世界史的文脈の影響を沖縄文学成立条件のなかに見定めることができた。特に、近現代沖縄文学の成立に、アジア進出をはかるアメリカ覇権の力学が深く関わっている点を明らかにしている点に本研究の学術的意義がある。また、沖縄文学成立研究が近代沖縄思想史への新しいアプローチに極めて有用であり、近現代の沖縄文学の成立の動きのなかに、社会運動的可能性が極めて豊富に示されている点を具体的に検証しえた点に本研究の社会的意義をみることができる。

研究成果の概要（英文）：The biggest result of this study is “okinewa ni turanaru”（Iwanami shoten.2018）.this book has received high evaluations in the academic reviews such as“misuzu publisfing”“book newspaper” Above all The result of this study is construction of basic data about the Okinawa literature. Particularly I was able to construct basic documental data about the Okinawan literature 1900～1920s .In addition I could write some articles based on these basics document and presented it some international symposiums.By these results of research, I could clarify the positioning of the Subjectivity to express in the Okinawa literature and the possibility of the Okinawa literature on thought.

研究分野：日本文学

キーワード：沖縄文学　言語意識　郷土　沖縄研究　アメリカ　沖縄思想史　社会運動

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

沖縄文学研究、なかでも沖縄文学成立に関する研究は、岡本恵徳と仲程昌徳という二人の先駆者によってその基礎が築かれた。岡本の「近代の沖縄における文学活動」（1972年4月号『文学』、後『現代沖縄の思想と文学』収録）と「近代沖縄文学史論」（1975年『沖縄県史第6巻』、後『沖縄文学の地平』収録）の二論文はこの研究の嚆矢であり、岡本の研究を継承発展させた仲程昌徳の『沖縄近代詩史研究』（1986年）や『沖縄の文学1927－1945年』（1991年）或いは『新青年の時代』（1994年）等の研究により、当該研究は詩歌を中心とする文献資料調査領域で大きな進展を遂げた。そして岡本と仲程の先駆的研究を踏まえて展開された後続研究の代表的成果として、野ざらし延男編『沖縄俳句総集』（1981年）や仲程昌徳・知念真理『沖縄近代短歌の基礎的研究』（2001年）等の重要文献が公刊されてきた。こうした先行研究により、沖縄文学成立に関する研究は詩歌ジャンルを軸とする方向性において進められた。こうした展開は、『沖縄文学論の方法』（1987年）や『雑誌とその時代　沖縄の声』（2015年）等に見られる仲程昌徳の基礎研究により更に推進された。あわせて、*Davinder.L.Bhowmik* “*Writing Okinawa*”（2008 年）や仲里効『悲しき亜言語帯－沖縄・交差する植民地主義』（2012 年）等の近年の優れた研究も、仲程の先行研究に多くを負いつつ、前近代的沖縄の伝統的価値意識と近代的主体意識の間で揺れる沖縄文学成立に関する表現意識のありようを明らかにするものとなっていることも確かである。しかし、短歌や俳句あるいは琉歌や詩といった韻文ジャンル研究の順調な進捗の一方で、沖縄文学成立に関する散文ジャンル研究は、質量ともに不十分なままである。

私自身、『沖縄文学という企て』（2003 年）『到来する沖縄』（2007 年）『沖縄を聞く』（2010 年）『沖縄の傷という回路』（2014 年）等の研究書を公刊し、沖縄文学表象の歴史的独自性を明らかにしてきたが、成立過程にまで遡り、沖縄文学の特質を考察する点は不十分であった。「国民化と言語」（2003 年）や「沖縄でサイードを読む」（2005 年）の二論文において、国民国家イデオロギーへの抗いを沖縄近代教育史における言語政策との比較において検討し、近代沖縄における伊波普猷の言語認識の可能性をサイードのポストコロニアル批評との関連性において明らかにし得たものの、それらの表現のなかに作動している近代日本ナショナリズム編成と沖縄の郷土意識との緊張を孕んだ葛藤を社会史や政治思想的視点から考察していく点は今後の研究課題として残された。関連して『沖縄を語ることの政治学にむけて』（『沖縄に立ちすくむ』2004 年）や「帝国のステレオタイプ　佐藤惣之助『琉球諸島風物詩集』考」（『文学』2006 年）等の論文で本研究の端緒についたところだが、考察はまだまだ不十分であり、今後本研究を本格的に進展させ沖縄文学成立過程を基礎的に精査していく必要がある。本研究の背景にあるのはこの研究的課題である。

## ２．研究の目的

本研究は、戦間期を挟む時期を軸とする沖縄文学成立過程を、小説と批評とに焦点を当てた文献資料調査収を実践し、沖縄に関わる文学の展開を、特にその表象の社会政治性に焦点を当て明らかにしていくことを目的とした。その際、次の 2 点が重点な目的となった。第 1 点目に、1900-1920 年代にかけて近代日本の国家再編のなかに沖縄が組み込まれていく歴史のなか、沖縄の地にあって文学活動を展開した、山城正忠、上間正雄、世禮國男、伊波月城といった作家たちの表現において、いかに沖縄が主題化され「郷土」認識が言説

化されていったかを、近代日本ナショナリズムにおける郷土言説との比較検討を踏まえて明示すること。第 2 点目に、佐藤惣之助、折口信夫といった、日本本土で沖縄に関する活動を展開した作家たちの言説の特質を考察し、あわせて、柳田國男と伊波普猷関連言説が、沖縄文学成立に強い影響力を及ぼしていく過程を検証すること。以上の 2 点である。

その際、日清・日露戦争が沖縄において惹起した歴史的変遷と移民や出稼ぎを背景とする方言と標準語との間で揺れる言語的葛藤やジェンダー編成を分析する点も研究目的とした。国民化の流れに沿いつつも、成立期の沖縄文学が独自の文学ジャンルとして国民化の流れを相対化しこれに抗う表現へと生成し、沖縄に生きる人間の政治的主体化を文学的想像力において開示していく過程を、文献調査収集と文献精読作業において明らかにしていくこともまた、研究における重要な目的となった。加えて、この研究を展開するにあたって、比嘉春潮、金城朝永、島袋全発、島袋源一郎といった、伊波普猷に後続する沖縄学第二世代の研究批評家たちの沖縄に関わる言説と沖縄文学成立との関わりについても基礎文献調査を軸として考察していく点をも重視した。

## 3. 研究の方法

本研究はまず基礎資料の調査収集を重視した。特に『琉球新報』『沖縄毎日新聞』『沖縄朝日新聞』などの沖縄地元新聞そして『琉球教育』『沖縄教育』『生活と自由』など明治大正期沖縄で刊行された教育・文芸雑誌における文学関連資料及び文化史関連資料の調査収集を持続的に進めた。同時に、これらの新聞雑誌メディア上に見出せる思想関連資料を収集した。この際、特に、生活改善運動のなかで抑圧されていく「方言」と近代化の象徴であった日本標準語との間の葛藤を生きる沖縄の人間の、政治的文化的主体化に関する言説と文学表現の関連性に注目して総合的な調査を進めた。具体的には、山城正忠、世禮國男、上間正雄、山城翠香に関する資料調査収集が中心となったが、戦禍によって文献資料の多くが焼失した沖縄の事情を鑑み、国会図書館、東京都立図書館あるいは川崎市立図書館等でも積極的に調査収集にあたり成果を得た。また上述の作家のほかに、日本本土を拠点に、沖縄文学に深く関わった表現者たちの文献資料も調査収集した。具体的には、柳田国男、伊波普猷、折口信夫、佐藤惣之助、池宮城積宝といった人々の関連資料調査収集がそれに当たる。特にその際集中的に『ホトトギス』や『日本詩人』あるい『新潮』や『三田文学』等の文学雑誌を精査し、この調査を基に、沖縄文学成立過程の特質を、近代日本文学そして近代日本思想の史的展開との比較検討作業において一定程度明らかにすることができた。その成果は、論文と学術会議等での発表においてその都度公開していった。

調査収集資料は膨大な量となったが、分析にあたっては、琉球処分以後、言語や生活習俗の「改善」に見られる教育義務化や徴兵・徴税に見られる近代日本の国民国家制度の急激な導入という時代趨勢のなか、沖縄を生きる表現者の主体意識がどのように生成し変容していったかを沖縄文学のなかに検証していくことを本研究の主な研究方法とした。そして、特に言語意識と郷土意識の生成に焦点を当てることを通じて、小説や批評といった言語表現がいかにして沖縄という主題を創出していくに至ったかの検証を優先した。

こうした検証では、具体的には上間正雄『ペルリの船』や世禮國男『阿旦のかげ』等の文学表現あるいは島袋全発や山城翠香の批評における「沖縄人・琉球人」をめぐる分裂的認識のあり方の表象分析が中心となり、その際、郷土としての沖縄イメージの創出と近代日本ナショナリズムとの矛盾を孕んだ葛藤等の問題について歴史に位置づけることを主要

な方法とした。この作業により、資料に基づき論文化が順次進められた。特に、世禮國男『阿旦のかげ』初版本を確定しこれを基に佐藤惣之助『琉球諸島風物詩集』と比較において世禮の表現の特異性を口頭発表（沖縄県立芸大）で示し得た点と、上間正雄『ペルリの船』に見られる東アジア近代史におけるアメリカ覇権の影響力について論文（琉球大学法文学部紀要）において論証することができた点は、本研究方法上の達成と言えるだろう。

## ４．研究成果

前述したとおり本研究の主要目的と方法は資料の調査収集にあったが、調査収集した基礎資料に基づき論文を刊行し、同時に、国内外の学会等において積極的に発表を行った。発表に関して具体的に言えば、立教大学主催国際学術シンポジウム「戦後の東アジアにおける日本語文学　移動・交流・支配」（2016年6月）における「想起され忘却させられるアメリカ－上間正雄『ペルリの船』を軸に」や国際シンポジウム「「台湾／満洲／朝鮮の植民主義と文化交渉」（2018年9月）における「沖縄文学における「外国語」表象」などがそれに該当する。またこうした作業と併行して、伊波普猷と柳田國男あるいは柳宗悦をはじめとする沖縄学の展開と沖縄文学の成立の深い相互的関連性を明らかできた点も成果といえる（「横に開かれていく沖縄学のために」韓国益山市地域学国際シンポジウム（招待講演）2016年11月、円光大学（韓国）など）。加えてまた、研究期間最終の2018年度には、次のような口頭発表を行った。1つは、日本社会文学会大会での「言葉のとり憑きについて」（2018年11月）。そして、2つ目は、沖縄芸術大学大学院公開講座での「文学と思想から表象を問い直す 近現代の沖縄を軸に―佐藤惣之助『琉球諸島風物詩集』世禮国男『阿旦のかげ』の比較から」である。これら発表で検討された沖縄文学成立におけるジェンダー編成や言語意識への考察については、現在論文化を進めており近く活字化される予定である。

関連して、論文でいうならば、沖縄近現代文学とその研究の成立に深い関連をもつ、岡本恵徳の批評や阿波根昌鴻の社会思想あるいは石牟礼道子の沖縄論の考察を通して、社会思想史的文脈や身体に関する表象意識が、沖縄文学の成立過程にいかに深く関与しその独自性を顕現化させているかを論文化することができた。また本研究成果として特筆される論文として、「想起と忘却のなかのアメリカ－上間正雄『ペルリの船』論」（「琉球アジア文化論集第4集）をあげることができる。これまでの先行研究究で閑却されてきた近代沖縄文学におけるアメリカ覇権をめぐる想起の政治性を論証した点をこの研究成果の独自性として挙げることができる。この論考において、1900年前後の沖縄をめぐる文学史的把握において重視されてこなかったアメリカ覇権の内面化による「琉球人」という主体画定の動きを、想起と忘却をめぐる文学表象の力学を明証した点が特筆される成果と言える。以上とあわせ2018年10月には『沖縄に連なる－思想と運動が出あうところ』（岩波書店）を公刊することができたが、この書の刊行もまた本研究に関連成果ということができる。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

1. 新城郁夫「想起と忘却のなかのアメリカ　上間正雄『ペルリの船』論」、『琉球大学法文学部紀要　琉球アジア文化論集第４集』、査読無し、2018 年、79-112 頁、

2.新城郁夫「沖縄が召喚する難民の世界史」、『現代思想４６巻６号』青土社、査読無し、2018年、123-127頁、

3. 新城郁夫 「石牟礼道子の沖縄―「耐えがたいわからなさ」という始まり」、『現代思想４７巻７号』青土社、査読無し、2018年、215-223頁

4. 新城郁夫 「歴史を捲りかえす―阿波根昌鴻『写真記録　人間の住んでいる島』を読む」、新城郁夫『沖縄に連なる』岩波書店、査読無し、2018年、53-76頁

5.新城郁夫「消化されえないものの体内化をめぐって―晩年の岡本恵徳を読む」、新城郁夫『沖縄に連なる』岩波書店、査読無し、2018年、77-92頁、

6.新城郁夫「横に開かれていく沖縄学のために」、『韓国益山市地域学国際シンポジウム報告集（韓国語）』査読無し、2016年、25-31頁、

7. 新城郁夫「帝国継承の彼方の沖縄へ」、査読無し、『ピープルズプラン73号』、査読無し、2016年、73-83頁、

〔学会発表〕（計5件）

1. 新城郁夫「文学と思想から表象を問い直す―佐藤惣之助『琉球諸島風物詩集』と世禮国男『阿旦のかげ』の比較から」、2019年2月1日、沖縄芸術大学大学院招聘講義、

2. 新城郁夫「言葉のとり憑きについて」日本社会文学会（招待発表）、2018年11月10日、沖縄国際大学

3.新城郁夫「沖縄文学における「外国語」表象」「台湾／満洲／朝鮮の植民主義と文化交渉」国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）、2018年9月8日、沖縄船員会館

4.新城郁夫「横に開かれていく沖縄学のために」韓国益山市地域学国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）2016年11月4日、円光大学（韓国）

5. 新城郁夫「想起され忘却させられるアメリカ－上間正雄『ペルリの船』を軸に」国際シンポジウム「戦後の東アジアにおける日本語文学の移動・交流・支配」（立教大学招待講演（国際学会）2016年6月12日、立教大学

〔図書〕（計2件）

1.新城郁夫『沖縄に連なる―思想と運動の出あうところ』岩波書店、2018年、全263頁

2.新城郁夫・鹿野政直『対談　沖縄を生きるということ』岩波書店、2017年、全208頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。